



有機肥料で栽培した屋久島粉茶などを販売



屋久島高生のアイデアで考案されたたんかんケーキの配布も

「屋久島粉茶」の魅力伝える

商・渡辺ゼミ SENDAI-Kaffee 4月9日まで

鹿児島県屋久島の粉茶の活用を切り口に、自然保護や食品ロス削減の大切さを伝えるイベント「春の屋久島Cafe」自然に優しい屋久島粉茶の魅力が、神田キャンパス10号館のSENDAI-Kaffeeで開かれている。

このイベントは、地域マーケティングやSDGsについて学ぶ商学部の商品やチラシを手にする小松さん、高野さん、渡辺教授(左から)。

鹿児島県屋久島の粉茶の活用を切り口に、自然保護や食品ロス削減の大切さを伝えるイベント「春の屋久島Cafe」自然に優しい屋久島粉茶の魅力が、神田キャンパス10号館のSENDAI-Kaffeeで開かれている。

このイベントは、地域マーケティングやSDGsについて学ぶ商学部の商品やチラシを手にする小松さん、高野さん、渡辺教授(左から)。



商品やチラシを手にする小松さん、高野さん、渡辺教授(左から)

商品企画コンテスト「Sカレ」

商・奥瀬ゼミが部門別1位

大学のゼミ対抗商品企画コンテスト「Sカレ」が行われ、3人は「冬カレ」で部門1位になり、商学部1位の賞状を手喜び3人(左から新井さん、塩澤さん、青山さん)



「かくしてほせるん」が部門1位の賞状を手喜び3人(左から新井さん、塩澤さん、青山さん)

「かくしてほせるん」が部門1位の賞状を手喜び3人(左から新井さん、塩澤さん、青山さん)

「かくしてほせるん」が部門1位の賞状を手喜び3人(左から新井さん、塩澤さん、青山さん)

「かくしてほせるん」が部門1位の賞状を手喜び3人(左から新井さん、塩澤さん、青山さん)

2作品がTVFで入賞

文・松原ゼミ ドキュメンタリー映像を制作



映像制作に取り組んだ放送学ゼミの学生たち

文学部ジャーナリズム「映像作品2点が、東京募があり、入賞となる学科の3年次生が制作し」ビデオフェスティバル2022(TV2022)で入賞した。学生問題を取り上げた『子ども問題を取り上げた』と『』は、佐藤萌花さんと林田侑未さんが制作。差別のない社会をつくるため奮闘する人々へのインタビューを通して、『現状を知らなければならぬ』と訴えた。林田さんは「ヘイトを無くすために活動している人たちは、立場は違っても同じ思いでいると感じた。この作品を見た多くの人たちに、その思いを伝えたい」と語っている。

性的マイノリティーと就職活動を始めた作品『自分らしく生きる』を作ったのは、三田村帆夏さん、十時倫緒さん、蜂谷来未さん。三田村さんは「当事者の声を伝えることで、多様な社会をつくるために一人一人ができることがあると感じ」と活動を振り返る。指導する松原特任教授は、放送局で長年ドキュメンタリー制作に携わっている。ゼミでは社会課題を映像化することをテーマに設定。TVFには4作品を応募した。松原特任教授は「入賞作品以外に、子宮頸がんワクチン接種の第1世代として情報不足を扱ったもの、大学生が政治問題に関心が低いわけではないことを丹念に取材したものなど、それぞれが自分たちの目線で取り組んだ。取材が難航する中でも、あきらめずに情報を集め、壁をこぎ開けて作品を仕上げたのは大したものだ」と語っている。

文・川上ゼミ 『SHOW』第16号を刊行

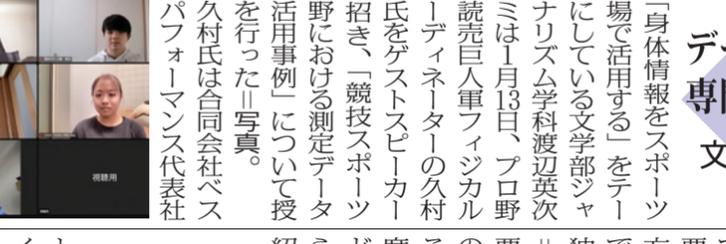


文学部川上隆志ゼミが年一回発行している雑誌『SHOW』第16号が完成した。「update」をテーマに、後継者問題、若者の性、環境問題について特集した。編集長を務めた都築咲紀さん

完成した『SHOW』を手にするゼミ生(3年次)は「一人一人が意識をアップデートさせた状態で、さまざまな問題と向き合う必要があるのではないか」と解説する。自身は性的特集を担当。関係者のロングインタビューを通して私もアップデートできた。ぜひ多くの人に読んでほしい」と語る。1次産業や企業の跡継ぎについて企画取材したのは2年次生。ピジュアルにもこだわり、深刻な問題を前向きに伝えた。

データ活用を専門家に学ぶ

文・渡辺ゼミ



「身体情報をスポーツ現場で活用する」をテーマにしている文学部ジャーナリズム学科渡辺英次ゼミは1月13日、プロ野球読売巨人軍フィジカルコーディネーターの久村浩氏をゲストスピーカーに招き、「競技スポーツ分野における測定データの活用事例」について授業を行った。写真。久村氏は合同会社ベストパフォーマンス代表社員として活躍中。

地域や体育会テーマに映像

文学部ジャーナリズム学科の必修科目「応用実習」では、福富忠和教授の指導で地域PRのための映像制作を学んでいる。体育会活動をテーマにした学生たちは8チームが、2本ずつ作品を完成させた。体育部長賞は、佐藤聖さんら2、3年次生6人による『本気だ』

「選手たちの格好良さや熱意を表現した」と語る。2月7日に生田キャンパスで表彰式が行われた。写真。川崎市川崎区と幸区の魅力を伝える計48本の作品は区職員が審査し、両区役所で表彰式があった。川崎区では民井わかさん(2年次)らの『400年前を歩こう』が、幸区では木村和美さん(2年次)らの『食から幸せが最優秀賞を受賞。』400年前を——』は、東海道川崎宿の魅力や情緒豊かに表現。『食から幸せ』は、コロナ禍で苦しむ飲食店の力になるべく企画した。

就職日より

「新3年次生へ」就職活動が本番を迎え、会社説明会や選考試験などで慌ただしいと思います。スケジュール管理はもうそろそろ体調にも十分注意して就職活動を進めてください。

一部のエージェントや就職塾による被害が報告されています。分らないことがあれば、まずキャリア形成支援課に相談してください。

受講したゼミ生は「一人一人足りないものが違ってくるから、データを駆使して個別の練習メニューを考えた方が、チームとしても個人としても、競技力が上がっていくと感じた」と話した。

渡辺教授は「コロナ禍で実践の機会が少ないなか、豊富な知見を共有いただき、データの収集とその扱い方を学ぶことができた。学生には今回の経験を卒業研究、運動指導の現場で生かしてほしい」と語っている。